

いっせいに花咲く街

赤座憲久作

鈴木義治画



913 いつせいに花咲く街

赤座憲久作

岩波書店 1974

240P. 21cm (岩波少年少女の本 25)

小学5,6年以上

岩波少年少女の本 25

■いつせいに花咲く街

定価 一〇〇〇円

一九七四年三月二十七日 第一刷発行 ©
一九七四年十二月二十五日 第二刷発行

作者 赤座憲久

画 鈴木義治

発行者 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五
岩波雄二郎

印刷者 板橋区板橋四丁目四七番七号 山田博
発行所 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

株式会社岩波書店

本文印刷 株式会社三陽社

製本 株式会社松岳社

表紙・箱・見返印刷 錦印刷株式会社

いっせいに花咲く街

赤座憲久作 鈴木義治画



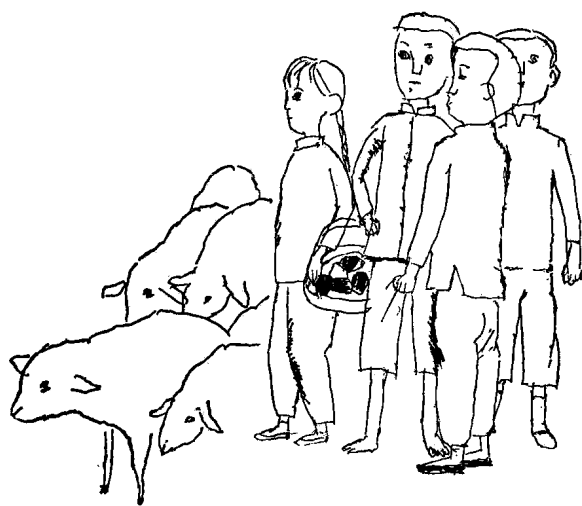
岩波書店

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

もくじ



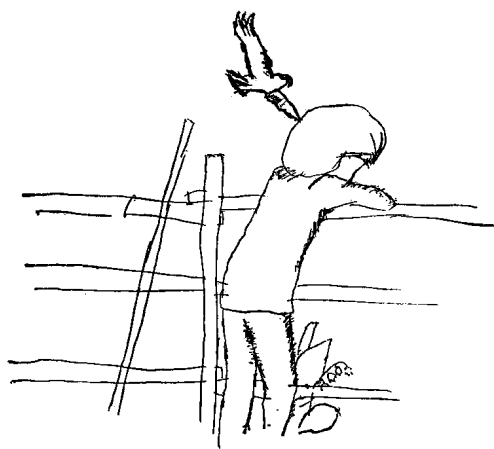


1	ユリの花……………	9
2	シャーベット……………	15
3	ピーとの出あい……………	23
4	ハルビンと田坂一家……………	33
5	盲目の詩人……………	41
6	草まつりの頃……………	49
7	ピーが怒る……………	59
8	牧童の秀栄……………	65

20	線	路……………	165
19	足	音……………	153
18	発疹	チフス……………	143
17	牧場の風景	……………	137
16	秀栄の父親の話	……………	131
15	秀栄の家	……………	121
14	石つぶて	……………	111
13	包子	……………	103
12	ソ連軍の軍政	……………	95
11	八月十五日	……………	87
10	空襲警報	……………	79
9	バケツリレー	……………	73



27	26	25	24	23	22	21
書き終えて……………	再 ^{ツライ} 見 ^{アヘン} ……………	再開 ^{さいかい} した学校……………	どろぼうトビ……………	立ち売り……………	約 ^{やく} 束 ^{きく} ……………	大きな誤解 ^{ごかい} ……………
237	223	211	205	195	183	175
	ふるさとは……………					
	231					



い
つ
せ
い
に
花
咲さ
く
街まち

赤あか
座ざ
憲のり
久ひさ





1 ユリの花

花壇^{かだん}の草花が、五月を待ちかねていたように咲きあふれ、庭隅^{にわすみ}のペンペン草やタンポポも咲きそろおう。アンズ、アカシヤ、ライラック、ナシ、リンゴ、ニレの木なども、いっせいに花をつける。

きびしい寒さの長かった街^{まち}に、春と初夏^{しよか}が一度に顔を出した。

その日、目の見えない一郎^{いちろう}が、ペランダでアコーディオンをひいていると、ニーナがスキップしながらやって来た。

「一郎^{イチロウ}、コンニチハ。ハイ。コノ花、何カワカル？」

「あつ、ユリの花だ。ニーナ、オーチン スパシ

「ボ（たいへん）ありがとう。いいかおりだなあ。ぼくの大好きな花。」

「カオリ、イイデシヨウ。ワタシ、一郎ガ喜ブト思ッタ。ヤッパリ喜ンダ。ワタシ嬉シイ。」

ユリの花束を、だきかかえている一郎の鼻先に、茶色の花粉がついている。ニーナは、それを自分のハンカチで、そっとふいてやりながら、いかにも満足そうに笑くぼを深める。

「道子ハ？ マダ？」

ニーナは、一郎の姉の、六年生になる道子と同年である。

「もう帰ってくる頃。少し待ってたら？」

「ウン、マタアトデ来ルヨ。」

ニーナが走り去ると、入れかわるように道子が帰って来た。

「ただいまあ。あら？ そのユリの花、どうしたの？」

「おかえり。今、ニーナが持って来てくれた。」

「そうお。ひと足ちがいだったのね。わたしもユリの花買って来たの。グラジオラスやシャクヤクやアザミなんか、街にいっぱい売りに出ているよ。一郎ちゃんには、ユリがいいと思った。ニーナもそう思ったんだね。」

そう言つて、一郎に、もうひと束ユリの花を持たせた。

「そうだよ。ね。ぼく、ユリの花好きなんだ。このユリの花って、白いんじゃない？」

「そうよ。わかる？」

と言ってしまったから、いけなかったかな？ と道子は思った。

見ることでできない一郎いちろうが、「白い。」なんて、色彩しきさいのことを言うから、つい聞いてしまった。でも、
「ぼく、わかるんだ。白いかおりがするんだもん。」

と、なんのこだわりもなさそうに答えるのを聞いて、道子はほっとした。

「白いかおり？」

「そう。ぼくは、ユリの花のかおりは、白いんだと思ってる。」

「じゃあ、ほかの色は？」

「黄色とか茶色ってのはね、ぼくが、こういう色だろうと、勝手に思ってる。たとえばね、手でさわってみて、すべすべした感じは黄色。さらさらしているのは茶色。自分でそうきめているの。白は、わかりやすい。」

雪は白いんだってね？ 雪はつめたいんだけど、あのつめたさを花にすると、このユリってわけ。」

「なあるほどね、じゃあ、つめたい感じの花ってわけ？」

「そうなの。まちがってるかな？」

「いやあ、まちがってなんかないよ。」

「赤い色もわかる。血は赤いっていうでしょ。燃もえてる火も赤いっていうね。あたたかいとか、熱あつい

というのが赤い色。」

「全くその通り。」

「でも、わからん色がたくさんあるからな。」

一郎の想像も及ばない色のあるのはあたりまえだが、それを、なぜそう言わせてしまったのか、また、道子はちょっと心配それに、眉毛のあたりをこわばらせた。

だが、一郎は少しも気にしていないらしい。

「色のことじゃないけど、ぼくにどうしても想像できんことがあるよ。」

学校へ行っているとすれば、四年生のはずの一郎は、この時とばかり道子に聞きはじめた。

「それはね、目つきとか、目があうっていうこと。どういうことなの？」

「目つきね。ふうん、どう言ったらいいかな？ 物を見るときのようにすと言ったらいいかしら。目があうってのは、視線があうってことなんだけど。」

「うん。それ、それ。シセンというのわからんな。シセンがあうっていったら、よけいわからんな。」

一郎は、手と手をあわせて、

「あうってのは、こういうこと？ ほかにあるの？」

「それもあう、だけど、人と人があうとか、洋服が体にあうとか。」

「そういうのはわかる。でも、シセンがあうというのは？」

「目と目があう。」

道子がそう言うと、いかにもけげんそうに聞き返す。

「目と目がくつつくの？」

「そうじゃなくて、遠くからでも、わたしが一郎ちゃんを見るでしょう。一郎ちゃんもわたしを見ろとするね。そうすると、そのことを目があうとか、視線があうっていうの。」

「あつたところは、どうなるの？」

「どうもならないよ。わたしが一郎ちゃんを見て、一郎ちゃんもわたしを見るっていうことよ。どっちもおたがいを見てること。」

「わからんなあ。それは、やっぱり、ぼくが見えんからわからんのだね。見えるってことは、どういうことなんか、それがわからんから。」

道子が困ってしまうと、一郎は、さっと話題を変えた。

「ぼくの花びんに、水入れて。」

「視線があうということは、もういいの？」

「またいつか。わからなきゃいいよ。」

「じゃあ、花びんに水を入れてあげようか。あら？ ビーは？」

「そこらあたりにいるんじゃない？ ぼくがアコーディオン持ちだしたときには、その木の枝に

たようだったよ。

そうだな。ニーナが来たときには、どっかへ行ってたのかな？ 空を飛んでたのかもしれない。」

そう話していると、風に舞いあがった紙きれが、ふぁさあっと地面に落ちるように、ピーが庭の芝生に降りたった。

「あ、ピーじゃない？ ねえさん。」

「そう、ピーよ。わたしたちの話を聞きつけたみたい。」

「ピー！」

一郎に呼ばれて、トビのピーはひと声ないた。



2 シャーベット

「オハヨウ、一郎^{イチロウ}。」

庭先から、ニーナが日本語で声をかける。

「ドウブラウートル。」（おはよう）

一郎^{いちろう}は、ロシア語であいさつしてから、きのうもらったユリの花のお礼を言った。が、ニーナはそれを聞きもしないで、ビーにえさを投^なげている一郎^{いちろう}に尋^{たず}ねた。

「オヤ？ ドウシタノ？ ドウシテ、ビーニエサ投^なゲルノ？」

「ビーのやつ、だめなんだ。手に持っていてやらないと食べないんだよ。それでね、自分で拾^{ひろ}って食べるようにさ、今、訓^く練^{れん}してるの。」